

<資 料>

## 翻訳 ダリエン

渡 辺 邦 博

目次

1. はじめに
2. 本章 ダリエン 原著：pp. 67-91
3. 補章 用語・人名・地名集

### 1. はじめに

太平洋と大西洋を結ぶ運河と聞けば、現代の私たちは20世紀初頭に開削されたパナマ運河を想起する。南北アメリカ大陸の地図を開いて、パナマ運河を探せば、北緯10度よりも南にそれは確認できる。

パナマシティは、太平洋に面したパナマ湾側である。ダリエンは、それよりさらに南、同じ地峡が南米大陸までうねるように続いて、ほぼ南米大陸に接するところのカリブ海側に存在する。原著書『ダリエンの大惨事』（1968年刊）の舞台である<sup>1)</sup>。

すでに、この地に関する第一歩が踏み出される前段階について、パターソンが持参した分厚い資料類があり、とりわけウエイファの手稿の一節では、たんなる示唆に過ぎなかったことが明らかとなったが、それを受けたスコットランドからいよいよ現地に出帆することになった。

イングランドによる、スコットランド会社への官民挙げての妨害の後、ス

---

1) John Prebble, *The Darien disaster*, 1968. 本稿は、そのpp. 67-91に相当する。

コットランド国内ではこの会社に多額の資金が集まって、南アメリカに出立する熱気があふれ、パターソンの知識と経験が求められた。大西洋と太平洋をまたぐ中軸、ダリエン計画である。その場合、パターソンが友人から借り受けたという書物の出版は1697年であったから、それこそ出版の前後ということになる。著者はウィリアム・ダンピア、さらにダンピアが詳細な情報を得たのは、ライオネル・ウェイファという船医であった。両名がカリブ海に面した地峡、エル・ドラドについて伝えた情報は、エディンバラの会社理事たち、政治家たちを魅了した。出版時点でのウェイファは植民を提案した訳ではなかったが、これを受け入れたスコットランドでは、そこに潜む危険の兆候を感じた者はなかったのである。

以下では、潰えることに終わった、パターソンたちの旧大陸での集金活動から視点が移され、ドレイク以来の海賊が跳梁した、ただし無数の小島、白砂の海岸の広がる、北緯8度から10度の地域について彼らがいかに受容したかが記される。

## 2. 本章 ダリエン

しかし、理事たちが読みとろうとした時見たいものを見たのであって、ウェイファは彼らを落胆させることはなかった。彼の言い方では、内陸部の土壌は、全体として非常に良質であり、黒く実り多い沃土である、と。〈p.68〉「ジャマイカで生育するものは、ここでも育つし、それも有り余るほど成長するのみである、と私は信じる」と。西側は広大なサバンナで、円錐状の丘とともに散在している乾燥地と草で覆われた牧草地だが、海からは、南に向かって山の方まで延びる一面にヒダのついた緑をなす、森林以外に何も見えない。海賊たちを歓迎するかのように湾曲した熱帯特有のヤシ並木から内側は、広大な樹木の空き地で、騎手ならまったく障害物もなしで何マイルでも疾走できる下草のない背丈の高い木立が、木の葉の屋根となって熱気から守っていた。このような木々の中には、周りが20フィートも30フィートもあるものもあり、その中には、芳香が異国情緒あふれ、色合いも

素晴らしく、おまけに遠く離れ、まるでエル・ドラド<sup>黄金郷</sup>でもなければ手に入らないような、素晴らしいニカラグアの樹木もあった。彼にはそれがどこに発見できるかとの確信も決してなく、スコットランド人がそれを見つけるはずもなかったが、ウェイファは後に、この地峡を完全に探検しようとするなら、6ヶ月もあれば、300名の人間で、この途方もない樹木を切り倒せると、主張した。改良委員会が、百単位で斧、手斧、かなそれにノコギリを発注したということは、彼らがこれを記憶に留めていたということになる。

ワタノキがあったが、その袋はナツメグほどの大きさで、短い繊維で一杯だったが、その幹は、カヌーと、スペイン人がピラグア、フランス人ならピロウグと呼んだ丸木舟以外には使い道がなかった。赤いコートの連隊のように立つヒマラヤスギ、卵の型をしたインコ、赤い果物、背が高く葉がなくトゲのある奇妙なビブの木などがあった。その木は黒くて、値打ちのないものだったが、インディアンたちは叩いて、その乳清のような樹液を飲み、その果肉から塗布するオイルを作った。マミーは、太陽に向かって60フィートも伸び、<sup>Sapadillo</sup>サパディロの丸い果物は、甘い素朴なりんごのようであった。ヒョウタンの木、黄色い花とともにパッと咲くトリネコの木があったが、その樹皮は丈夫で紐のようだったので、ロープやザラザラの布地になった。<sup>Lait Wood</sup>焚き付けの木は重さがほとんどなく、ひとりの人間でも、力がなくとも木全体を肩に乗せて運ぶことができた。それを材料にして、インディアンたちは最高のカヌーを作ったが、海賊たちは、彼らの銃口用に栓を彫った。以上ですべてではなかった。白木は、ウェイファの考えでは、立派な戸棚の象嵌に持ってこいだった。ログウットの低木は、豪華で赤い色だったので、切ると出血するように見えた。「私はそれをちょっと試してみた。流水の中で2時間煮詰めると、血のような赤になる。私はその中に綿をひとかたまり浸けると、<p.69>真っ赤に染まり、洗っても染料は落ちなかった。それは、鮮明で光沢のある赤で、とても印象的であった」。

川べりや海岸の湿地には、房を揺らした竹が育ち、地面が乾燥している所では灰色に、満潮で洗われる場合には赤色となるむき出しの根の上で、マン

グローブがたけなわ状態であった。シナモンやタマリンド、サトウキビやヒラウチサボテン、イナゴマメやコショウなど、すべてがそこにはあった。理事たちは、人間が神の恵みに種蒔きをすれば取り入れること以外に何もないと、考えたに相違ない。いい匂いのする花を咲かせるタバコ、鎌を一振りすれば、緑色のたつぷりと汁の出る莖から切り取れるブランテーン。白や紫色のヤムイモ、2種類のキャッサバ、一方はポテトのように食することができるが、他方はそれから有毒な汁が搾り取られさえすればパン用の粉が得られる。ウェイファは、種も<sup>サヤ</sup>仁もなく、6ポンド以上の重さで、人の頭ほどの大きさのパイナップルを収穫したが、それは、1年中熟して、味の点ではとても満足が行くもので、彼の想像する限りもっとも美味しい果物のすべてを合わせたものに似ていると考えたほどであった。

こうしてエデンを待つ中には、不思議な鳥や獣、多くは人の手助けとなり、わずかながらおそれる必要があるものもいた。黒い色をして短い脚が敏捷な野生の豚の肉は、そんな気候であっても数日間十分に保存が効いたし、「とても美味しく、洗練された肉で、滋養に富み、よい味をしていた」。臆病な赤い鹿がヒマラヤスギの間を影法師のように動き、インディアンたちはその肉を食べようとはしなかったが、海賊たちは勝ち取った大変なご馳走に熱中してそれを丸焼きにした。イングランドの野うさぎほどもある大きなウサギが樹木の根の下に住んでいて、彼らの肉は、ウェイファがイングランドで味わったどのウサギよりも良い味で、しっとりしていた。荒々しく、毛むくじゃらの野生の犬がおり、インディアンたちは狩り用に飼いならし、200から300からなる一群で狩猟をする、歯をむき出して唸る獣であった。背の高い木々には騒がしい猿たちが鈴なりで、白いのもいたが、大方はクロで、老人のようなあごひげがあり、果物を食べて太っており、食するとよい味がした。ヘビはいたが、ウェイファの見限りガラガラヘビはおらず、木の葉や木の根や牧草には蜘蛛がウヨウヨしていたが、どれも人に害を与えるものではなかった。川にはワニや分厚い舌のあるイグアナもいたが、どちらも食用になるもので、ウェイファはアリゲーターの尻尾をとりたてて推奨した。岸

辺にはオカガニがおり、ロンドンの露店でみうけられるどれよりも大きかったし、カメなどはいくらでもいて、新鮮なのが容易に捕まえられた。「そこには、アカガエルやヒキガエル、さらにそれ以外の昆虫類がいたが、  
<p. 70>私は特段それらを気にとめなかった」。

この森の小さな木立の深い緑が、信じがたいほどの鳥たちの鮮やかな色で真っ赤に染まった。キラキラ輝く羽でできたジョセフ・コートをもったオウムやインコたち。カギ状のツメと赤と青の流れるような尻尾のあるゴンゴウインコ。彼らは、カササギのように飼い慣らされるので、夜明けになると彼ら自身の起床ラッパの号令を響かせたが、それは、「まるで喉にものを言わせる人間のように」しわがれて深みのある鳴き声であった。彼は、マダラのキツツキが強靭なツメで木立の中を上り下りするのを目撃したし、彼らの肉は、味の点ではいまひとつで上品ではなかったが、空腹の時にはそれを食しても、差し支えがなかった。ハンマーのように直立する鮮やかな尻尾の持ち主の、異様なチカリー・チカリーは、彼に高慢な雑種のオンドリを思い出させた。クアームは、太った、果物を食べる鳥だったが、ヤマウズラのような味覚を楽しませるところがあり、黒いハウカンチョウは黄色の立派な櫛と、甘く愛嬌のある声の持ち主だった。水辺には、水掻きがあり、灰色の毛のあるペリカンたちがおり、それを海賊たちが海岸沿いにジタバタさせて追いかけた後棍棒で殴り殺して、その丈夫なほお袋からタバコ袋を作った。黒い鶴は、海岸に近い岩場から漁をしたが、樹木や低木に止まっているのでウェイファを驚かせたものだった。旋回するカモメは飛んでいるところを海賊たちに狙い撃ちされ、その後熱い砂の中に8から10時間埋められると、蒸し焼きとなって、彼らの口に合うものとなった。その美しいことと、その肉の美味なことで際立った、実に多くの鳥がいたのだった。

鳩ほどの大きさのコウモリ、蚊、スズメバチ、カブトムシ、それから夜の茂みの中で立ち上る火花のようなホタルなどがいた。ウェイファは、あるものは赤く太っており、別のものは長く、黒い色をして細身のハチを見て驚嘆した。彼らは甘いハチミツと良質のミツロウを拵えたが、人はなんら怖がる

ことなくその腕を木の中のハチの巣に差し込むことができた。「私は、まったく刺されることなく、裸の身体の上でしばしその多くを掴んでいた。その結果、彼らには毒針がないと考えることになっていたが、それは、試したことでは決してなかった」。しかしながら、アリは刺す可能性があり、賢明な人なら自分のハンモックを彼らの要塞塚からあまり近過ぎる所に吊すことはなかった。

海の中には、サメ、ホシザメ、さらにカマス、サファイア色の鱗のあるメカジキ、ウサギのような口をしたカワカマスがいた。岩礁にはタマキリガイとカサガイが、水たまりには小さなロブスターほどの大きさのザリガニ、真珠層がチラチラ光るホラガイなどもいた。「そして、私が見たことも聞いたこともない、その他多くのものがおそらくいただろう、というのも、この海は、魚類をととても豊富に蓄えていたところだったから」。

<p. 71> その地峡に住む<sup>C u n a</sup>族と<sup>C h o c o</sup>族のインディアンたちは、黒い肌と黒い髪をした友好的な人たちで、(キーツが後年勇者コルテスに委ねたパシフィック・ピークを登坂する)バルボアが最初に目撃して以来180年というもの何ら変わっていない。ウェイファは彼らのことを称賛、尊敬し、彼らのことを、その運命に対して必要以上に満足している貧しく無防備な人たちと考えてはいたが、懐かしそうに彼らに愛情を持っていた。

人々の体格は通常およそ5ないし6フィートである。彼らは、直毛で、均整のとれた体格で、骨格ががっしりして、豊かな胸部を持つ、端正な体形である。私は、彼らを見ていて、身体に欠陥があったり、奇形であるようなものを見たことがない。彼らは、とても敏捷で如才なく、走るのが得意だ。しかし、女性は丸々として、肉付きがよく、体形は整って、引き締まった眼をしている。年老いた女性たちはぱっとしない。というのも、彼らの腹や胸は、たれ下がり、しわくちゃである。男女ともに丸顔でだんご鼻だが、目は大きくたいいは灰色だが、若い時には活発で、はつらつとしている。彼らは額が発達して歯並びのよい白い歯で

唇はうすく、口は節度ある大きさである。彼らの頬やアゴは均整がとれている。つまり全体として彼らは容姿がよいのだが、女性よりも男性がそうである。

彼らは、きれい好きで節制のきく人たちで、かりに騒々しく食事をして、彼らがみんなでそれぞれの指を一つのひょうたんの中に入れたとしても、ヨーロッパ人なら誰もが当世風のやり方として欠かせないような自分自身の行動のたしなみを備えていた。彼らはどんなことにも飾り気がなく、慎重で、身に付けるもの、生活習慣、武器、装飾品などは、質素で、適切なものであった。自分たちのまっすぐで長い髪の毛を誇りにして、時間をかけて櫛をいれ、首まで伸びても稀にしか切らなかつたが、女性が身体の後ろに2本の棒で巻き上げるのは認めていた。戦士が、名誉の印として、髪の毛を切り、体を黒く染めることはあつたが、これは、敵であるスペイン人を殺害した後の行為であつて、両者は同じ意味を持ったことであつた。ウェイファは、彼らの滑らかで汚れのない皮膚の輝きが、太陽の下では小麦色に、炉火のそばでは赤銅色となることにうっとりした。彼らの中には、昼間は怠惰で活気がないが、夜になると森の中を野性の鹿のように翔る白子が何人かいた。彼らはピンクと言うより、「むしろ乳白色で、白馬の色にずっと似ていた」。こうしたあわれな、追放された突然変異の者たちは、海賊たちからは嘲笑われたが、インディアンたちによって怪物として崇められたのだった。

<p.72>この人々と赤褐色のインディアンたちは、時には乳呑み子であっても、身体に彩色を施した。彼らは、鳥、獣、人間、樹木、その他、身体の上から下まであらゆる部分、特に顔面に模様を付けたが、その画像は、彼らが見本とするもの同様に、決して異常なものではなく、彼らの空想の導くままで次元の異なるものである。女性たちは、画家であつて、それをとても楽しんでた。彼らが好んで使う色は、赤、黄そして青であつて、とても鮮やかで、心を惹かれるものである。彼らはそ

れらはある種の油で混ぜ合わせ、使えるようにヒョウタンに入れて保存したが、普通はそれを皮膚の表面に木製の筆で塗り付け、端っこに筆の柔らかい部分を当ててかじり取った。そのようにして塗った後、彼らは何週間か継続して、いく度となく、繰り返えされた。

ウェイファは、自ら意味のないことを存分に楽しみ、自分の身体がそうして色を付けられる間、足を組み辛抱強く座って、インディアンたちを喜ばせた。女性たちは、布か木の葉で作ったエプロンを身につけ、腰の周りに結ぶなり、膝やくるぶしにぶら下げていた。その布は海賊どもかスペイン人たちから手に入れたもので、華やかな色彩によって子供のように興奮していた。ウェイファとダンピアは、その妻に空色のペティコートを与えて、かつて「不機嫌なインディアンを説き伏せた」ことがあった。男たちでも、着古した上着とか、うっちゃっておいたシャツで気を良くしたが、彼らの先祖代々のコードピース股袋を忘れてヨーロッパ人たち全員を笑わせた、途方もない装身具のようなものを除けば、通常の場合彼らは、裸であった。これは、ロウソク消しのように湾曲した円錐形のもので、ペニスに巻きつけ、紐で腰に止められ、何はともあれ背を向けなければ誰もそれを外すこともできないシロモノであった。それは木の葉などで気の効いた作りになっており、身に付ける者が金持ちで、ひとかどの地位のある人物の場合には金や銀でできていたのだった。

両金属<金や銀>は稀だが、明らかにインディアンたちから珍重されていた。彼らはハンマーでうすく三日月型の板に引き延ばし、口の上に鼻孔からそれをぶら下げていた。「私が彼らの中であって身につけていたものは」とウェイファは自慢げに「金でできていた」と語った。各人は、当該の日、行事、寄り合い、狩猟、あるいは隊列の重要さに応じて、その大きさは違っていたが、いくつかを身につけていた。女性は、ガチョウの羽を何枚も重ねた円形のリングを鼻にはめていた。「それは彼女らの唇を軽く叩く状態だったが、その板金もリングも、彼女たちのおしゃべりを大して妨げることはなかった」。しかしながら、食事の時には、彼らは板金とリングの両方を外し



て、それを鼻に戻す前に金属に磨きをかけたのだった。〈p. 73〉彼らは、場合によっては300から400もになった、貝殻やビーズでできたネックレスをまとっていたが、こうした場合、貧しい女性では、20ポンドの重さのあるものを身にまととうことができなかったが、男性の場合はそれ以上でも大丈夫だった。

ヨーロッパ人が称して族長とか村長<sup>ヘッドマン</sup>とか言う、インディアンの王様や首領は、彼らの口や耳に、ハートの形をした金の板金を、胸や背中には、派手な色を付けたそれを身につけていた。ウェイファは、<sup>Lacenta</sup>ラセンタと呼ばれるものが、この地峡では最も力があると考えたが、彼がかつてその森の大集会にやって来た模様を記憶にとどめていた。鼻当て板や、イヤリングや胴鎧だけでなく、幅が8から9インチもある同じ金属でできた王冠を彼が身につけて、籐の台座に登った。彼の武装した護衛兵もまた王冠をかぶっていたが、籐だけでできて、朱の色が付けられ、オウムやインコさらにコンゴウインコの羽根で飾られたものであった。

彼らの村は簡素で、その小屋はプランテーションの葉っぱの屋根があるだけであった。それぞれの村の真ん中には、若い未婚の男たちが、武器の使用と男としての義務の訓練を受ける長細い<sup>warehouse</sup>武器庫があった。100フィート以上の長ささと高さがあり、25フィートの幅があるこの建物はすべての村の防衛の砦でもあって、その壁には矢狭間があり、扉は棍棒と槍と槍で守られていた。鎧を着た男がプランテーションの葉っぱを通り抜けることができたが、スペイン人は決して白兵戦でロングハウスを攻撃したりはしなかった。彼らはそれに火を放った。そして炎から逃れるインディアンたちを打ち倒したのだった。

クーナ族の丸く澄んだ眼が、ウェイファの散文的な表現によれば簡素な台座から、理事たちを凝視しており、彼が発音通りに書き記した言葉や言い回しの中で、彼らのしわがれ声が、ぺちゃくちゃと音を立てた。彼の言うには、ゲール語についての彼の知識が彼のその言葉の習得に役立った。「オンナハンモックガアルカ」…「ハンモックノナカデネルカ？」…「コレヲナントヨブカ？」…彼の身体に塗料を塗り、鼻あてを付けるだけでなく、彼は

彼らの結婚式で酔い潰れ、強烈なタバコの煙で肺を満たし、彼らと共に踊り、彼らの奇妙な歌を歌った。彼らの宴が果てると、他の男たち同様にハンモックでお手上げになって眠った。その間女たちが、飲みすぎた身体を冷やすために彼に水を振りかけた。彼はインディアンたちの飾り気のない宗教に敬意を払った。彼の言うには、女たちはあくせく働いてはいたが、<p.74>インディアンが自らの妻を打ち据えたり、彼女に厳しい言い方をするのを知らないと述べた。彼らが吞んでくれて口論した時でさえ、男たちはいつでも女子どもには穏やかな態度で接した。彼は彼らの音に対する愛着、彼らのハミングや、葦でこしらえた細長いフルートを指で奏でて作り上げた音楽だが、それを高く評価していた。彼らは明け方から日没まで踊ることができたし、その後ホコリを洗い身体から取り除くためよく川に飛び込んだものだった。彼らはありのままの威厳を持って流れから歩を進め、彼らの腕を長時間、優しく撫でて、その髪の毛や皮膚を乾かしたのだった。

彼らは、腕の高さは、人がその目的地に到着できる日中の時を示すというように、指差しという簡単な方法で、指図を示した。彼らは時計による時刻を持たず、一日や1週間を特別に区別せず、月齢に従って月を数えた。彼らは100までしか数えることができず、それ以上はなくて、それ以上の数に対しては、髪の毛の束を振った。彼らの法律は簡潔で、当を得たものだった。彼らは不義を働いたものや盗人の命を奪ったが、それ以外の罪は問わなかった。彼らは成人すると誓いをたて、その誓いは忠実に守った。彼らはその子供たちを思春期になるまでは気ままにさせたが、女子がオムツを、男子がジョウゴを付けると、大人になる長い訓練を始めた。

彼らは鉱山での苦役を受け入れたり、他の種族に立ち向かうスペイン人の土着民兵士として従軍したとはいえ、スペイン人を憎みかつ恐れた。しかし、彼らは海賊たちにはあまり逆らわず、こうした者たちの荒っぽい友情には、好意と誠実を持って応えた。ラセンタ<sup>Lacenta</sup>の妻たちの一人が病気になる時、ウェイファは許されて彼女の瀉血をほどこし、熱がなくなるまで12オンス放血した。ラセンタは、膝を折り、この船医の手にキスをした。

それから残りの者が私の周りに集まり、ある者は私の腕に、他の者は私の膝に、またある者は私の足にとキスをして、そのあと私はハンモックに持ち上げられ、男たちの肩に乗せて運ばれた。…その後、必要とされた人たちに、医術と静脈切開を施して、大いなる荣誉と名声を得て、暮らしたのだった。

会社の理事たちが自問すべきだったのは、ダリエンがそのような楽園であったとしても、およそ2世紀にもわたって、その東部、西南部にまでその土地を占領して植民を行っていないながら、スペインがどうしてそこに居を定めなかったのかということだった。彼らはその代わり、これを<sup>t h e D o n s</sup>スペイン人による愚かな手抜きであったとみなし、その国はどんな国によっても、正統に所有権が主張できると信ずる方を選んだのであった。<p. 75>彼らはもちろんボルジア教皇の勅書を聞き及んでいたが、それは200年もの間プロテスタントにもカトリックにも無視されてきたし、ただスペインとポルトガルだけに、真面目に受け取られていたのだった。ウェイファはダリエンがスペインの一領土であることに異を唱えることはなかったが、ありうることとして誰かがそれをスペインから奪い取ることが当然ではないのは何故なのか理解してはいなかった。スペイン人たちは、パナマ地峡全体に駐屯地、要塞、そして町や村落を所有していたが、彼らはかなり賢明であったから、アメリカに長く滞在して、ダリエンのような湿地帯で時間と人員を浪費することはどうやらなくなっていた。ウェイファによると、ポルトベロの狭い通りと素晴らしい港の上の要塞には、ノンブレ・ド・ディオスの駐屯地も合わせれば、3000の兵員がいた。東側の南アメリカ沿岸部には、カルタヘナの強力な駐屯地と海軍基地があった。その地峡の南側には、サンタ・マリアの柵を巡らした街が200の歩兵に守られており、2000人以上が植民地総督の本拠地であった有名なパナマ市に配置されていた。ヘンリ・モーガンによる流血の無慈悲な略取が行われ、パナマ旧市街が焼き払われ、金銀、奴隷や女たちが略奪された1691年以来、スペイン人たちが新たな都市を建設し、それ

を文字通り難攻不落なものとした。その白い壁から北に向かって、スペイン帝国のけい動脈、つまりペルーの財宝を積んだラバ隊用の山岳路であった、ポルトベロに至る道路が延びており、ひとりこの理由だけで、スペインはこの地峡では他のヨーロッパ人を認めることはなかった。スペインはアメリカ海域で二つの艦隊を保有していたが、一つは大陸近海で、もう一つは南海に配置され、ダリエンの沿岸では、北部艦隊からガレオン大型帆船やピンネース軽帆船が訪れたり、指定されることがない港湾や入江は一つもなかった。ダリエンのインディアンたちはしぶしぶとかのカトリック国王の配下となり、彼らの酋長たちはスペイン風の名前をつけられ、必要とあらば租税や鉱山労働者の供出を余儀なくされ、その働きに対しては古びたマスケット銃や錆び付いたカタピラで支払いが行われた。

もしもスコットランド人たちが以上のことを理解せず、ましてやダリエンにあるのは豊富な食糧と甘いハチミツだけということを理解しなかったとすれば、それはウェイファの過ちではなかった。なぜなら、彼は、損害、危険、不安に対しては包み隠すことはなかったのだから。だが、彼らは彼の話の中の驚かせるような外観によって眼を眩わされ、自分たち自身の強欲で興奮させられたのだった。彼らは良い匂いのする木の木立の中の斧の音を聞いたし、また彼らは、堅牢な砦や緑なす農場、広い港湾に停泊した大きな商船を見たのだ。<p. 76>彼らが再三再四、さらにいま一度理解すべきだったことは、ウェイファが気候について語らざるをえなかったことに尽きた。誠に豊穡な植生、夥しい森林、湿地、低湿地、澄み渡る小川や河川、それ自身の腐敗物の上で生命が豊かに成長することは、事の一面しか意味を持ち得なかった。その大地は微笑みかけると思えば、猛威も振るうものだった。

雨が降った。どれほど雨が降ったか、ヒリヒリする膝を抱えてインディアンたちの小屋に横たわり、終わることのない水の音にどれほど耳をかたむけたか、とウェイファは伝えていた。雨は4月か5月に始まり、激しさを増しながら9月まで続いた。「太陽が雲から顔を出すところでは何処でも、この時期は同時にとても暑い時期である。その時は空気は非常にとても蒸し暑

い。と言うのも、そういう場合、暑さに風を送り、涼を与える微風なるものが全くないからである」。10月には嵐が緩むが、それが止むのが時に1月になる、つまり1年の3分の1、おそらくはほんの4分の1がまったく雨の降らない季節であった。四季は、ヤチツツジにかかる冷たいサラサラした音と地面を轟々と音を立てて流れるイングランドの春をウェイファに思い出させた、短く突然の雨で始まった。それから、1日のうちに二、三度の激しい雨が降り、雷が連続して轟いて、黒雲を稲光が突き刺し、木々の下に硫黄の匂いを残した。

この変わりやすい天候の後、およそ4から6週間というものは落ち着いて、二、三日の間昼か夜には雨が続き、雷も稲妻もないが、その長さを考えれば激しいを越すものであった。だが、この一定期間は、四季のうちでも一番湿気のある時でさえ、竜巻や雷雨だけはあっても、数日の間は晴れる日が混在していた。つまり、1週間を通して時々ではあったが。こうした雷雨は、空気を圧迫する雲によって、気の利いた風を通常は引き起こしたが、これがとても清々しく、夏を和らげるものである。

こうした強い風はさわやかではあったが、それは同時に樹木をなぎ倒し、川をせき止め、湿地を、西部ではサバンナsavannahsを緑色の悪臭のする湖に変えた。この嵐の間の短い期間には取り立てて静寂なことはまったくなかった。「あなたには、from a great way together 広々した彼方から、カエルやヒキガエルたちの鳴き声、蚊やブヨたちのブンブンという声、騒々しくて落ち着きのない、ヘビやその他の虫たちのシューツとか、キーキーと言う声が聞こえる。〈p. 77〉中にはアヒルのガーガーなく声に似たものもある」。クリスマスにはどちらかと言えば晴れた気候がやっつては来るが、溢れ出る水の腐食した岸辺となっている湿地から、夜になってから新たに孵化した虫たちの群れのどよめきが現れた。ウェイファは、これを「厄介な害虫」と呼んだ。それが同時に命取りになるということは、続く200年もの間思いも至らないことであった。

「ここはとても湿度の高い土地だ」とはウェイファの言い草であった。しかし、彼らの会合の議事録<sup>minutes</sup>、彼らの船舶の在庫目録、衣料、調度品それに交易の品々を見たところで、理事たちが、ダリエンが熱帯の中でも最も湿度の多い地域のひとつであるとの彼の警告を深刻に受け止め、そのことから、そこに植民を行うヨーロッパ人たちが、熱病、マラリア、さらに情けないほどの怠惰の結果としての精神の腐敗によって、おそるべき被害を被るかも知れないという彼の警告を深刻に受け止める何の指摘もなかったのであった。

「私は私の諸問題の残りを行ったのだから、以下のことに耐えなければならぬ」、エディンバラとハンブルグ、1696年7月から1697年6月

聡明なパターソン、今やバラッドでは彼がそう呼ばれている、賢明なパターソン、有益な法律の創始者にしてパターソン流の政府の設計者。人々は、この政府の意味を明らかにすることも、政府が制定するはずの健全な法令の一つに名前を与えることが難しいのも理解してはいたが、誰もがこのバラッドに賛成した。アジアやアメリカのどこかに未来の植民地があるとして、将来それが確立するところでなら、不満の原因はなくなり、党派的な論争や苦情もまったくなくなる。3年以内に、野蛮なインディアンたちは、「スコットランド会社に栄えあれ」と叫ぶだろう。彼らの魂は交易によって高揚させられ、彼らの肉体は解放され、彼らの素朴な心は満足で一杯になる。街角の歌には誇張もあったが、その会社とその初期の勢いの多くを与えたひたむきな感情を表わしていた。

スコットランドには、正義の、決して死ぬことがない高名がある。われわれは、アジア、アフリカにおり、アメリカは自由、自由を宣言する。いや、痛み入る。

そのすべてが、われわれの前にある。

さてところで、この会社は、パターソンのために十分なことができていないように思われた。外国貿易委員会に彼を指名して2週間以内に、そして彼の書類を快く受け入れて1週間以内に、<p. 78>彼と二人の理事たちができるだけ早くアムステルダムとドイツに出発すべきとの合意があった。そこで彼らのすべきことは、「この会社に関係して必要と思われる外国貿易商人その他と契約するのみならず、同時にそれによってこの貿易に有益だとみなすことができる交渉や合意を作成ならびに決済を行うこと」であった。この会社は、「ヨーロッパの交易にとって最良の首脳部と財力」なしには、生き延びることができないとの彼の頑強な信念を遅ればせながら承認したもので、それは、説得力という彼に特異な才能を賢明に使ったものであった。彼は安心させられるべきだったが、彼はそうならなかった。10年にわたる彼の失望が彼の愛情を弱々しいものに消耗させ、彼は批判に対して過敏になっていた。彼は懐疑的で、イライラするようになっていた。彼はどんな褒め言葉の背後にも敵意を感じ、どんな微笑みにも悪意を抱いた。ロンドンにいた時彼は、エディンバラの陰謀団が彼を破滅させようとしたと信じていたが、今やスコットランドで彼は、一度は彼の友人たちであったロンドンのスコットランド人たちが彼の失敗を画策していると疑った。彼はこのことを、求めに応じてエディンバラに到着したロバート・ダグラスがエディンバラに到着した時、何人かの慎重なスコットランド人たちの中に、植民地についてのこの会社の提案に対する彼の経験にもとづく判断を求めた者もあったことで、これに確信を持ったように思われる。

パターソンは、カーペンター氏の館での白熱の議論と、彼の同僚たちの妬みと疑惑のため、彼の身分を捨てざるを得なくなった恐るべき午後のことを思い出した。彼は、憤りでほとんど狂乱状態となって、その会社の<sup>council-general</sup>理事会の<sup>great men</sup>大物たちの同情と支援を求める訴えをした。ダグラスが、彼を非難しにやって来た。ちょうどロンドンで「私と、彼の言う私の仲間を解任し、巻き直しをする」ことを試みたように、彼のみならず、会社もその国のことも、彼はアナンデイル伯に告げた。その結果、今回はパターソンは常に忍耐と礼節を

もって自らを処したのであった。実際、パターソンが仕事や利益を求めたと訴える、悪意に満ちた噂話もあった。もしも理事会がこのことを本当に信じたならば、彼を解任して、彼の地位を別の者ですげ替えてもよかった。おそらく彼を中傷したものが、役員の一にはあっただろう。もしも彼が、自らの利益を会社のものよりも重要だとしたのならば、彼は喜んでそうした人間に席を譲ったであろう。

私はこう言わねばならない。つまり、私の人生の全ての成り行きを通じて、この問題についてほど私の評価が、大きな問題と呼んだことはない。〈p. 79〉さて、それは私にとって決してた易い問題ではない。評判なるものは、私が細心の注意を払うただ一つのことである。そうだ、この場合、私についての悪い噂こそが、イングランドにおいて燎原の火の如く飛び交おうとしている。つまり、私は、特殊な状態で、国民的な憎悪のもとにある。しかし、忍耐力だ！私がこれまで私の困難な時を通じて全てにそうしてきたように、これに耐えなければならない。私は、我が主と我が友人たちの全てが、一人の人間の背後にある悪意ある噂に当惑しないのなら私が気を遣うことはありません。

それは悲しくも子どもじみた1通の書簡であった。そして、それがおそらくアナンデイル伯をうんざりさせたのだ。彼は自分の公的な人生のほとんどを自らのために費やして来たので、その結果、彼自身が潔白であることについて騒ぎを起こすような人間は、愚か者とか嘘つきとかと考えられるような危険を犯したのだと信ずることになったのであろう。

ダグラスは、エディンバラの友人に対して、彼が正当にも結論を下したことが、植民地に関するこの会社の計画であったことに長々と理由を挙げた否認を送り、サリーの自宅へと南に下った。これがダリエンについて計画されるべきものだったとは誰一人公式には認めなかったが、彼はこの国がパターソンに惑わされたと考えていた。つまり彼は、9年前のアムステルダムにお



ける仲間内のコーヒー・ハウスのお喋りを思い出したのだった。「私は彼の計画の説明を聞いたが、それは、彼がああ貧しい惨めな君主と好んで呼び、その領土の防衛は、この計画に関わろうとするすべての人たちによって確保されると嘯いていた、ダリエンの皇帝の国土に、共和国と自由港を建設するものだった」、と。ダグラスは、彼の同国人たちが愚かにも、東インド貿易に関する考え全てを放棄し、惨事に終わるしかない、この会社の資産を馬鹿げたファンドやカリブ海の冒険事業に委ねるしかない、彼の同国人たちの無邪気なことに衝撃を受けた。

私の友人たちは、目隠しをされて喜びのために、たがいにわれを忘れた。……彼はこの会社を欺いたばかりでなく、（さらに、実際に、それに全面的に関係した国家をも、）彼が、非常に危険で、費用のかかる事業を、彼らの小さなストックによって企てるよう彼らに実行させた。はたして、スペインとの長い戦争の後、最後にそれを完成し、それ無くしては何ら利益があるとはならないが、二つの海の主人となることができたとしても、それは、彼らの手にある何十万以上に何百万以上の費用がかかることを信じる方が理にかなっている。

<p. 80>この予測、つまり悲劇的にも、正確な警告はエディンバラでは密かに広まっていたが、それがあつた人たちにその熱狂を抑制させ、別の人たちは神のおかげでその会社に財産を危険にさらせない原因となったのだが、理事たちはそれを無視した。彼らがウェイファの物語の中の暗黙の警告を無視したのだ。彼らは多忙であり、忙しいということによって、構想、計画、契約、合意などに巻き込まれて、一人の妬み深い商人の辛口の意見に関心を持つことができなかつたのだった。

例えば、はるか北方出身のハイランドマン、クルのジョン・マンロウ博士のような、(2年間に1500人を要したと思われる)薬物、食料の総監督——<sup>Supervisor-General</sup>と同様に、外国貿易委員会が関心を持ったのは、会社の業務のことで

あった。彼は後に、ダリエンにおけるしかるべき薬物の不足を乗り切った幾人かから横領のかどで逮捕されたが、彼は意思堅固で、機敏な働き手であった。……彼はまた、根気強く疲れを知らない働き手であった。彼はここかしこ、そしてどこであれ、その夏は、ダンディー、モントロウゼ、アバディーン、インバネス、ウィックと、塩漬けビーフ、干し鱈を買い付け、ピストル、火打ち銃、チェシャ・チーズとバターを注文し、膨大な量の火薬、飲み薬、奴隷や軟膏を整えることを、エディンバラの4軒の薬剤師店に指図して、出没していた。彼がやっておらず、行う時間もなかったことは、別の人間が行った。ビスケットが発注され、焼かれ、買い付けられ、樽に詰められた(ジェイムズ・バルフォアは、それを300トン見繕うように言われていた)。200頭の雄牛がリースに追い立てられ、そこである血なまぐさい日に屠殺され、その後その週のうちに樽に詰められた。黒と黄色のラム酒10トン、赤ワイン5トン、大樽4つ分のマスケット用火打石、オーク製の樽単位の獣脂と豚肉、鋤、<sup>根掘り機</sup>マタックと鋏、角スプーンと白鑄鉄製の燭台、釣針と格子縞の長靴下、などなど、こうしてリースの倉庫は、次第に満杯となった。

9月30日、この委員会は、明らかに皮肉な見通しを受けた。2千連の紙がこの植民地のために発注されたが、ダリエンのスコットランド人たちが、お互いに誹謗しあう不満の機会にこれを大いに使う定めにあった。

<sup>ホラント</sup>オランダと<sup>英</sup>ドイツでは、この会社の船舶が既に購入されたか、建造中であった。ジェイムズ・ギブスンが早々とアムステルダムの一商人から46門を備えた交易船を手に入れたが、それは、操舵には優しく、操るには快適な、<sup>セイント・フランシス号</sup>と呼ばれる、金メッキを施し、大きく光を放つ船舶であった。スコットランドよりも<sup>英</sup>ブリディッシュ<sup>国</sup>愛国主義が急迫する中、それは後にこの理事たちに共有されることがなくなり、ギブスンはこの船をユニオン号と改名した。(p.81) 粗野で残忍な人間ではあったが、彼はグラーズゴウ市長であった兄のウォルターの船舶の海外での航海士や船長として生涯を海に費やした。しばしば拘束付き奴隷や囚人たちを植民地に運ぶ

ことによって、彼らが築いた富によって彼らは、富裕で影響力のある、この会社の出資者や理事となったので、ジェイムズ・ギブスの野望は、今や植民地における職務と利益を含むものとなっていた。9月29日、一面に大樽やガラスが並び、赤煉瓦の、オランダのアムステルダム・スコットランド商人の運河沿いの館において、彼はユニオン号よりも大きな、2番目の船の契約書に署名をした。船大工のウィレム・ディレックソンによって作り上げられた時には、それは、反り上がった船嘴、赤と緑の鎧張アルワーク、絨しょうの防波壁、背後甲板の大きなホイツ制ップ御スタッフ装、ランタン類、キューピッド、カリアティッドなどでいっぱい派のバロック調手の船尾、おまけにすでにこの船のために選ばれた「立ち上る太陽」と言う名前の金ピカの宝珠オブを持ち、オランダ東インド会社の大型帆船のどれにも劣らず堅固で対航性のあるものとなるはずであった。

ハンブルグの北方にあるリュウベックでは、アリゲザンダー・ステイーヴンソンが、さらに4隻の船舶の建設を発注し、一艘の洗練された横梁がすでにバルト海に姿を見せていた。二人の男はこれらの諸船舶を配置する権利を与えられていたが、その契約、最終的支払いの完了は、パターソンと彼の同僚の責任となっていた。

そのうちのどれもがアムステルダムに向けて出港するのは10月中旬以前のはずだった。スターリング城の司令官カーノックのジョン・アースキン大佐と、グレンイーグルズのホールデンが、パターソンの同伴者に指名され、ジェイムズ・スミスがロンドンから彼らに合流するように伝えられていた。アースキンは、ホールデン同様に、あの革命の政治的宗教的諸原理に断固として奉じており、その国の名誉と繁栄とに気を配っていた。若い頃彼は法学徒であったが、アーガイルが西部でジェイムズ2世に反旗を翻して蜂起した時に、軍服と剣の擁護をやめていた。彼は、順風が彼をオランダに誘うまで、ボーネスの沖合のある船の船底に身を伏せて、命からがらこの痛ましい惨事を逃れていた。彼は4年後オレンジ公のウィリアムと共に帰国し、亡命によって保証された昇任や引き立てに浴することになった。彼は、植民地の

成功に関する格別個人的な関心を持っていた。1684年彼の兄弟であった、カードロス卿が、(ウォルター・ギブスの所有で、ジェイムズ・ギブスの指揮になる船に乗って)カロライナでの惨めにも失敗に終わった植民で、  
<p. 82>追放となった契約派のものたちと自由植民者たちからなる、混合中隊を率いた。アースキンは、兄弟とその友人たちに別れを告げるためにグエロックに赴いたが、フォース・クライドを越えて別れを奏でる船上のトランペットからの耳に残る調べを決して忘れることはなかった。

彼とパターソンは共にリースを離れてアムステルダムに向かい、ホールデンがロンドン経由で後を追うとの合意があったので、スミスも同伴した。パターソンは、その会社が現に彼に与えた信頼は絶対的なものではあったが、エディンバラを離れることをよしとした。彼は船舶と備品の購入のため、出資者たちに対する最初の<sup>払込み</sup>コールの4分の1に相当する、2500ポンドを与えられており、彼自身の責任によって、それが彼自身ないしは、海外のその他の人によって振り出されたすべての手形を受け取るのに使用されるとの指示と共に、ロンドンのジェイムズ・スミスに、彼がこの中から17000ポンドを送った。彼はアムステルダムとハンブルグで出資帳を開設するのを切望し、その上で、誰に対しても、そこにいる彼の友人たち、商人たち、議員たちや<sup>princes</sup>君主たちが、出資を待ち構えていることを確信していた。それでもなお、多くのうわさが彼を悩ませた。特に、彼がロンドンでの投機を潰すため東インド会社によって買収されたという、ダグラスの冷笑が形を変えて語られたが、今や彼は、アナンデイルへの別れの手紙で説明したように、そうした悪意は妬みからくるものと結論していた。

妬みというものはいつでも、どの人間の繁栄にもつきまとうもので、私の生まれつきの欠点も、私の同国人たちのいく人かのそれと同じく、疑いもなく、これらの物事に対する通常の取り扱い方に動かされやすいので、私がこれまで発見してきたのと同様に、今のところ私は、こうした事柄に対する裁量の処方箋は、忍耐にあると理解している。私は、揺籃

期のヘラクレスがやった様に、この会社はこう言う蛇をすべて握りつぶすべきである、と希望する。

ひとたび彼が立ち去ると、このヘラクレスは、ローデリック・マッケンジの事務員たちに、パターソンがこの理事会に貸与した、写本、雑誌、書類などすべての明確な写しを作成するのに、かれらの空き時間を使うように伝えた。

アムステルダムでは、<sup>commissioners</sup>委員たちが、ジェイムズ・ギブスンによって、このための場所がいくつか整えられるのを目撃した。この会社の法令がオランダ語に翻訳され、印刷の上製本され、オランダの独立商人たちの間に配られた。当初オランダ人は、インド貿易でスコットランド人に合流する考えに惹きつけられたが、<p 83>彼らの熱意は長くは続かなかった。それは、彼ら<オランダ人>がスコットランドの<sup>colors</sup>国旗を掲げて航海し、スコットランドの港に名ばかりの寄港をすれば、20%のうち3%をその会社に与えるから、彼らはそのことでイングランドやオランダの会社などより安売りして儲けることができると思えば、この会社が誰に対しても有利な手数料を付与する権限を与えられることを、パターソンが内々に豪語したと主張する酒場の流言によって、先ずは水をさされた。この<sup>commissioners</sup>委員会は、この流言を躍起になって否定したが、強力なオランダの東西インド会社が、整然としたチューリップの苗床に出現したこのアザミによる激しい危機に気づかされることはなからうと信じていたかも知れない。イングランドの東インド会社ほど壮大でもなく、広く知られた事業もなかったので、彼らの不満の兆しが囁かれると、彼らはこの出資帳に対する関心をすっかり引っ込めてしまった。パターソンとアースキンは、彼らの惨めな失敗があまりに明白なものとなり、この会社の敵対者たちに必要以上の満足を与えるのを恐れ、それでもアムステルダムを離れるのに躊躇して、そこに留まった。冬がやってくると、運河は凍てつき、<sup>ボルダー</sup>干拓地からやって来た強風を前にして風車がせわしく回ると、彼らは「立ち上る太陽」からのできる限りの安らぎを手にした。その装備と備品と

の最終契約である。彼らはディレクスの凍てついた庭を訪れ、ハンマーとノコギリ、溶けた油、樹脂とテレピンなどからの勇気づけられる騒音を聞き、彼らの夢であった大商船が素晴らしい丸い船体や船体楼の彫刻に成るのを見守った。

ホールデンが、12月にオランダにやって来たが、彼は、小声で無知と無邪気を表明していた、奇妙に胡散臭く役立たずのスミスを伴っていた。彼は囚人のように振る舞ったが、ある意味ではそれが彼の偽らざるところであった。ホールデンがロンドンに到着した時すでに彼は何よりもずっと不安げで、スミスの物事の処理の仕方に猜疑心を持ったが、パターソンがすでにロンドンに送った金から8000ポンドがなくなったことが判明するとついに警戒することになった。スミスは即座に説明をした。不足額はパターソンがすでに振り出した手形によって相殺されたと彼は述べ、彼がそれについてその粉飾に関わった彼の友人と後援者のせいにしたとの事実によって、関係がないように思われた。ホールデンは、折り目正しい人物だったので、パターソンが説明の機会を与えられる前に彼のことを悪く思うのにはしぶしぶであった。2つの会社のロンドンの代理人たちの立ち合いの上、スミスの書類は梱包され封印の上で、次にはホールデンの荷物に入れられてオランダに運ばれた。<p.84>何らかの理由で、勾留の恐れがあり、スミスはホールデンの同席を勧められた。

パターソンはこの知らせに衝撃を受けた。アースキンとホールデンは後に、「彼がこの期待はずれを耳にした時、どれほど驚いたか、最後にこの会社が確保される運びとなつて、スミスに個人資産を見つげさせるように、彼がどれほど熱心に、なおかつ注意深かつたことか」と書き記した。彼らはまた、パターソンの無実を信じていた。その時、理屈を超えた寛大さを持って、彼らが言うには、インチキ野郎が、あっという間に彼らとその会社を犠牲にしたのだ。

12月と1月を通じて、ディレクスの造船所に近い宿舎では、3名の委員<sup>Commissioners</sup>たちがスミスに対する陰気な尋問役となり、彼が否認<sup>defiance</sup>と惨めな供述<sup>submission</sup>とを繰り返

返すやり方に困惑した。最終的に彼が認めたと思われる彼の罪状は、<sup>difficulties</sup>財政困難は重要でなく、資金の埋め合わせ、ないしは、その辺りが、一番重要であった。もしもこの事態が公となれば、たちまちアムステルダムでの出資開設が失敗となり、それはハンブルグでの彼らの成功の望みにも取り戻せない痛手となるとも、彼らは信じた。彼ら<尋問者たち>がエディンバラにいつ情報を伝えたのかは明らかでないが、理事たちは、会社が、<sup>Commissioneres</sup>スミス、ないしパターソン、あるいはその両者に行く公の行為は、委員たちがスコットランドに戻るまで延期されるべきだとの合意はあった。しかしながら彼らは、「相応の外国からの出資という援助がなければ、この会社は、目下のところ、パターソンの説明した<sup>design</sup>計画を実行する状態にはない」と宣言して、一つの奇妙な解決法を承認した。言われるところの計画とは、もちろん依然としてダリエンのことで、この解決法の意図は、誰によらず混乱させられたに相違ないし、イングランド人を狼狽させたであろう。というのも、第二の解決法が、理屈に合わないことに、アメリカに植民地を設立するというこの会社の決定を再度容認したのだから。もっとありそうなことは、それがパターソンに対する遠回しの警告であった。彼の現在の評価だけでなく、植民地に対する信頼という形での彼の将来の<sup>share</sup>役割が、ハンザ商人たちとの成功の如何に依存していたのであった。

2月、彼とアースキンは、「立ち上る太陽」の建造を見届け、惨めなスミスを念入りな調査に従わせるため、ホールデンをアムステルダムに残し、ハンブルグ向けの船で出発した。彼が<sup>money</sup>資金をどうしたのか？ ロンドンなり西インド諸島での彼の<sup>assets</sup>資産とは何か？ その解約なり、会社への払い戻しは何時になるのか？ 彼が自らのロンドンの住まいに残したトランクの中には、<p. 85>別の関係書類はなかったのか？

ハンブルグの事業も失敗で、当初好調を約束していたので、アムステルダム以上に悲惨であった。この場合、イングランドが北海を跨いで軍備を展開し、パターソンの希望を打ちのめした。この戦闘の終わりの冷酷な<sup>hand</sup>裁き手は、パウル・リカートというハンブルグのイングランド<sup>Resident</sup>総領事だったが、

素っ気ない、退屈な人間で、その書簡を見ると、自分の主人の声に従うことで悪意に満ちた楽しみをあらわにするような人の<sup>willing</sup>言いなりになる役人<sup>civil servant</sup>であった。8月以来彼は、インド貿易のために船舶を購入・建造のためにやって来た「スコットランド人のある一団」<sup>crew</sup>についての報告を送っていた。彼の言うところでは、彼がその者たちに会ったことも、彼らの会社を頼みにした訳でもなかった。彼らの指導者たちは「活発で手際のよい人間」で、彼とステューヴンソンがお互いの知り合いの家で差し向かいで会合を持った時には、スコットランド人が徹底して鼻であしらう体であった。リカートは、貿易委員だったウィリアム・ブラスウェイトと<sup>Secretary of State</sup>か国務大臣のウィリアム・トランプルから、国王は、スコットランド人がハンザの諸港で開業するのに不快感を持つだろうと聞くのを喜びにしていた。神の<sup>help and grace</sup>思し召しがあれば、彼らが<sup>providence</sup>この地に地盤を手に入れることなどない、との意見であった。

私めは、これまで、そしてこれからも彼らの動きのすべてを非常に油断なく見ておりますし、彼らの<sup>business</sup>仕事<sup>business</sup>が、船舶の建造の域を出るものではないのを確信しております。……何らかの動きがあったとは、今のところ思っておりませんし、スコットランドの委員たちがやって来るまで、どう考えても延期留保されるような動きもございませんでした。と申しますのも、私めが存じおらないところで、彼らがここで隠匿することも、私めの特段検閲してない交渉ごともあり得ないからでございます。

彼は、イングランドの否認とウィリアム王の怒りとによって彼らを恫喝する、ハンザ同盟の町全てに大袈裟な書状を送った。彼は自分の前で、ハンブルグ<sup>Senate</sup>議会の<sup>Senate</sup>議員たちに、それ以上に厳しい言葉で同じことを述べるように要請し、輪をかけるように彼の秘書に、この場合にはラテン語で別の書簡を書くように命じた。それは、この会社との協定や合意に対して彼らに警告を与えて、ハンブルグ、ブレーメン、リューベックの閣下たち、名士たち、市民



たちに対して、しかるべき礼儀を持って配達された。これはすべて、「スコットランド人の計画に打撃を与えることができるように八方手を尽くすべし」と言う意味であった。

<p. 86>彼は、まるで一匹の猫のように、<sup>Commissioners</sup>委員たちの到着を待った。そのうちの一人は、彼が自信のなさそうな軽蔑を現して言った、「領主、少なくとも<sup>レアド</sup>地主の息子」で、もう一人のパターソンは、金持ちや黄金の時代だという約束でオランダ人を騙すのに失敗した、貧しい嘘つきだったと。2月13日の月曜日、彼は、アースキンとパターソンが、ハンブルグに到着して2日以内に、彼の家の入口に来ると聞かされて、驚き、おそらくは悩まされた。彼らがそうするとの彼の言い草とは異なり、彼から逃れることなく、二人は、「国王に対する義務や敬意を離れて、国王の<sup>Minister</sup>臣下である私に挨拶するためやってきたことを知らせるために」訪れた。彼は、彼らの意図について質問を精査することを彼らに依頼することによって、凶日がある程度よいものに変えた。パターソンは、彼がイングランドによい影響を与え、スコットランドとイングランドとは、ブリテンの名の下にひとつの国であるべきだと常に信じていると、明言した。彼は、彼らができるだけ速やかにその会社の出資帳を開設することを意図しているのを率直に認めた。リカートは、トラムブルに対して、彼らがそれから隔たる状態になるとは考えられない、つまり「商人たちが、計画についてそれほど不明瞭だとか疑わしいとか考えようとしているとは思えない」と、告げた。

しかし、念のために、彼が10月に示したハンブルグの<sup>Senators</sup>議員たちの警告を思い出し、3日後、彼らが<sup>syndics</sup>評議員たちの一人に、イングランド国王の承認なくしては、スコットランドとの<sup>treaties agreements</sup>条約や合意の認可はありえないことを彼に確認させるべく送致した時、子供のように喜んだ。

しかしながら、実際には、ハンザ商人たちは、パターソンに喜んで耳を貸し、然るべき優先権に便宜を払ったので、彼の希望は実を結んだ。彼とアースキンとは、リカートに対して、彼らの船舶が何艘か出港する前に彼らの出資帳が開設されることはないと告げていたし、現に、記憶の限りでは最悪の

バルト海の冬にもかかわらず、リューベックの船大工たちは、そのうちの2隻を予定通りに完成していた。リューベック湾沿岸では屋根の雪や氷がまだ残る、3月の第2週にそれらは進水した。波止場の風には、セント・アンドルーズの十字架とこの会社の立ち上る太陽が煌き、船舶の金色の船尾から常緑樹の枝が掛かり、カナリア産ぶどう酒の大樽が開けられ、雇われのラッパ吹きたちは、響き渡る歓喜の合図で、凍てついた空気を引き裂いた。この

<sup>vessels</sup>船は、<sup>Instauration</sup>カレドニアと復興と呼ばれた。リカートは嫌味たっぷり、スコットランド人たちが、ハンブルグ商人たちがその財産の配分に与るとの希望のもとに、結構な名前だと称した。

<p. 87> <sup>The Resident</sup>総督代理は、スコットランドによるこのささやかな勝利の後の数日間意気消沈したが、その後アムステルダムからの新たな知らせによって元

気付けられた。スミスと称するスコットランド会社の一員が、彼の取引相手 <sup>correspondent</sup>に書いたことだが、すでに着服のかどで逮捕され、パタースンがその共犯 <sup>confederate</sup>であったと噂された。「単なる一つのうわさ以上のものではなかったけれども」とリカートがプラスウェイトに述べたが、「しかし、それは、このあたりで <sup>D A R T S</sup>この会社への信頼をすべて台無しにするのに十分だ」。これによって彼が意図したことが、この噂を可能な限り広めるのをその任務としようとしたのは疑いはない。

そしてそれから、彼は再び落胆させられ、パタースンが、「まだ公になってはいないいくつかの条項 <sup>articles</sup>の合意がなされた、この都市の最も裕福で資産を持つ人々といくつかの商談を」継続していたことを聞いて、不安となった。彼はこのことを、秘書からスコットランド人が再び玄関にいるとの報告を受けた時、トラムブルに書き送った。この時、彼らのうちの3名がいたが、その一人ホールデン氏（リカートは、この名前を正しく綴れなかった）は、アムステルダムから到着したばかりだった。4人目のスミス氏も同様だったが、彼は旅に疲れていて、いつか別の日に <sup>Resident</sup>総督を訪問するべく退出を求めた。リカートは、詮索好きを抑えて、別の日にアムステルダムの拘置所にいたと言われる男が、どうして翌日には、ハンブルグで彼に会見を求めること

ができたのかなどと、トラムブルにわざわざ説明するようなことはなかった。彼は、これらの面倒で、まじめ腐った顔のスコットランド人たちが、彼に話すべき何かがあることに一層面食らったのであった。彼らはこの会社の出資帳の条項を完成し、それを、他の大都市はもちろん、ブレーメン、ハンブルグ、ライプチヒ、ドレスデン、及びフランクフルトにおいて公表して、そこで出資を受け付ける人間を雇うつもりであった。さらに、彼らは、セル公爵<sup>Dukes</sup>、ブルムズウィック公爵<sup>B r u n s w i c k</sup>、ウルフェン公爵といった著名な人たちの支援を確信していたのであった。

リカートは、そのうちの一言も信じてはいなかった。彼は、リユーネブルグ宮廷のイングランド外交官クリセット氏によって、それがすべて嘘で、公爵にふさわしいユーモアに真っ向から反するものだと確信していたが、これが、イングランドのトランペットからのもうひとつの警告の一吹き的好機だとの結論を下した。彼はその秘書であったオース氏<sup>O r t h</sup>に、ドイツ人にとって、スコットランド会社への投資は利益の希望がほとんどないし全然ない、危険なやまとなると警告する、ドイツ語の小冊子を書き、印刷し、配布するように命じた。その結果、オース氏がそれを実行した時、今度はフランス語で同じことをするように命じられたのだった。1日かそこらは、パターソンは弁明を書くことも考えたが、<p.88>こうした考えは時間の浪費として、退けた。その代わりに、スコットランド人たちが、ハンブルグ為替交換所の上の一室で4月8日火曜日に彼らの出資帳を開設することを発表し、その議会<sup>Senate</sup>に対して、その入り口の上に、「これがスコットランド会社の社屋である」という大胆な看板<sup>sign</sup>を開設する許可を求めた。リカートは憤慨した。「わたしはもっぱら、この筆頭市長<sup>chief Burgomaster</sup>に、そのような容認をすると、私の主人である国王の命によって、私がこれまで度重なる警告を繰り返して来た、この会社に完全に譲歩することになることにひたすら理解を求めてきました」。彼の横柄な空威張りにうんざりして、しばらくはその議会も、スコットランド人たちがその看板を掲げるのに許可がなされるのかなされないのか、明言するのを拒んだ。

4月5日の夕刻、パターソンはリカートを訪ね、夕食を期待しているかに

見えたが、招待されたのではなかった。<sup>Resident</sup>総督は、丁重に彼を受け入れた、つまり、彼によると「私のところにおいでになる他のすべての方々に対するのと同様に」—この情報収集方法が、イライラするほど困ったことではあるが、彼の密偵たちよりも労力がかからず、信頼もおけるとおそらくは考えて、のことだったろう。パターソンが、総督の同情を取り付け、スコットランド人はバルト海域でのイングランドの貿易会社の利害を損ねる意思はないのを確信させるために、誠実で馬鹿正直とも言える試みをしていたとも考えられる。リカートは、パターソンが彼に正直に伝えた情報だけを報告した。アースキン、スミスおよびホールデン（この人物を今ではリカートが、<sup>Coneguy Walden</sup>コネギーのウォールデンと呼んでいる）は、<sup>Lubeck</sup>リューベック、<sup>Gluckstadt</sup>グルックシュタート、<sup>Torminggen</sup>トルミンゲン<sup>en</sup>の会社の出資帳への支援を確保するために出払っていた。食卓に何があったとしても、総督の消化を改善するものだった可能性はあり得ない。

4月7日、彼<総督>はスコットランド人と袂を分かち潮時だと決めた。彼と<sup>Cresset</sup>クレセットはハンブルグの<sup>Senate</sup>議会から<sup>deputies</sup>代理人たちを召喚して、「この年にこの新たな会社にかなる特権も与えないだけでなく、彼らの社屋のためのいかなる標語もその入り口に書き記す許可も与えない」と素っ気なく命じた。その会合は、フランス語で書かれ、<sup>Envoy</sup>総督と外交官による署名がなされた、この<sup>Senate</sup>議会で記念式典のあった午後まで続いた。ハンブルグへのスコットランド人の進出、彼らの会社と与えられる<sup>encouragement</sup>奨励が、間違いなく国王の怒りをかうことになるイングランド国王に対する無礼な行為であったと言われた。<sup>Senate</sup>議会は、ハンブルグ市とイングランド王国との間に存在するべき良好な関係をそれがかき乱す前に、この不幸な事態を修復するように要請を受けた。

<p. 89>この横柄な威嚇は成功した。パターソンは出資帳を開設したが、誰一人来るものはなかった。数名の鉄面皮の商人たちが後に出資はしたが、ほんのわずかな額で、たっぷりでも気前の良い反応でもなく、彼らの名前は笑い草となった。スコットランド人たちは、さらに2週間ハンブルグに留まり、さらに2隻がリューベックに出航するのを見届け、リカートの小冊子に

対するひどく効果のない反論を出版し、その後敗北を受け入れた。アースキン、スミスにホールデンは、4月23日金曜日にオランダに向けて出発し、翌日パターソンがそれに続いた。「われわれが彼らをお払い箱にして満足だ」と、リカートは述べた。彼らは、従順なオース氏<sup>O r t h</sup>に対して、国王の前で苦言を呈するつもりだったのだと彼は聞いた。「と言うのも、彼がその著者だとは証明できず、万が一彼らができたとしても、ドイツ語の文書を書いたことで、彼と私は、われわれ二人が、そのことによって国王陛下のご立腹を受ける恐れがないとの義務を果たしたことで十分満足しているのだから」。

アムステルダムにあっては、スミスがこの委員会<sup>Commission</sup>の信頼された一員であるとのみっともないふりを続ける必要は今やなくなった。彼が進んで囚われの者であることを選んで、何らかの赦免を望むことがなければ、別の者たちが彼の脱出を妨げるなどということがどんなに不可解なことだったろうか。ホールデンは、より大きな安全のためオランダの拘置所に彼を委ねた。それも彼がロンドンないしはスコットランドの別の収監所に移送されるかもしれないというその日に備えてであった。スミスは、彼には、この会社をペテンに掛けるといった意図は全くなかったことが信じられないのなら、自殺しそうだという涙ながらの手紙をホールデン宛に書いて、泣き崩れた。彼は担保<sup>B a r r i</sup>としてハムステッドの水道への株券を提供し、残りは、カリブなり、その東の海域で継続中の事業のための商船の装備から得られるだろうと付言して、18ヶ月にわたり5000ポンドを返済することを申し出た。しかし、彼が現在収監中だということがロンドンに知られるようなことがあれば、1ペンスも稼ぐ希望はないことになる。「もしもこの条件であなたが私を自由の身にしてくれて、その上であなたに関心がある人々なり会社から、その後に非難されるようなことがあれば、彼らの得心がゆくまで、あなたの命ずることで、あなたの囚人としての責任を果たすことを衷心から約束します」。ホールデンの寛大な心が緩み、彼はその男をロンドンに赴かせ、彼が可能な限りの資金を稼がせることになった。

パターソンは、重い心でスコットランドに帰還した。彼の関わったすべて

のこと、ロンドン会社、アムステルダム、ハンブルグ、は不毛の失敗に変わった。エディンバラのコーヒーハウスの壁から彼を歓迎する、新たなバラッドは、酷い皮肉であった。

<p.90>至る所に数々の訪れをして、  
賢いパターソンはそれ以上に多くのものとともに、  
経験と言うものを満載して、再び戻って、  
国内でその技を広めるために闘う

彼は、夏から秋にかけて、詐欺という疑いを一掃する機会を待った。彼は拒否され追放され、町のうわさはバラッド作者たちを喜ばせる話し方を直ぐに止めた。ホールデンはスミスの財産の売却によって資金のいくらかを取り戻したが、債務の大部分の残高はなお顕著なものだった。かりにそのすべてが戻ったとしても、それでパターソンの汚名を雪ぐことはなかった。11月にこの会社は遂に彼を尋問するべく委員を指名した。その構成員は二人だけで、ロバート・ブラックウッドと、グラーズゴウ大学の学長ウィリアム・ダンロップであった。両名ともに分別があり、同情心のある人物で、自らの責務を汚すことなく、彼を助けようと考えた。彼らは、彼が資金を返済できるかと尋ねたが、彼は何ら基金がないと述べた。彼はほとんど文なし状態だった。彼がロンドンの事業を引き揚げることによって現在この会社に負っているところ以上を失った。もしも理事会が業務を彼から解放するなら、彼は何らかの商業的事業で金を稼ごうと努力したであろう。彼が放免されることがなければ、この会社は彼の事業からの利益によって負債をふさぐことにもなった。彼はこの会社に背信した訳ではなかったけれども、彼は、彼が高く評価し過ぎた盗人に対する責任をとったのだった。

彼らの報告の中で、ブラックウッドとダンロップは、愚かな行いであったということ以上にかなることも彼には問わず、「パターソン氏が、その会社の利益に十分報いる人物だった」時代の総会Council generalのことを思い出させた。彼ら

は、寛大にも、その会社で彼をその仕事に留め置き、植民地の建設がなれば、そこで、彼自身が背負った債務を返済できるように赴くことを認めるように勧めた。彼の見識と評価、彼の技量と手腕とは、手離すのが愚かなことだったと。

総会は、彼にそれ以上を求めることはなかった。彼は<sup>Court of Directors</sup>理事会からは免職となった。彼の書類や刊行物などは彼に戻らなかったし、その会社の資産に占める株式も引き上げられ、彼が植民地に赴くことが許されるべきだと委員会の推薦も拒否された。彼は大事業の周辺では影の多い人物となったが、彼がスコットランドを立ち去ったとしても、<p.91>彼を非難する者はほとんどなく、多くのものは救われたであっだろう。

しかし彼は踏みとどまった。

「スコットランドの帽子、大量に；英語の聖書、1500…」

エディンバラとロンドン、1697年7月から1698年7月

夏がやってきた。陽があたらず、いま一度収穫を台なしにし、耐えがたい窮乏の。それは、7年にもわたる恐ろしい年月の2年目の年だった。当面は厳しい窮乏だったが、直ぐにひどい飢饉となっただろう。来る年も来る年も雪が早々にやって来て、遅くまで残る。夏の雨が羊や家畜の足元を腐らせ、まだ未熟な穀物で希望のない畑を真っ黒にした。人々は彼らの子供たちを何人か農園のために売り払い、その結果彼らは残った人たちのためのパンを買うことができた。その世紀が終わる前には、飢餓のために死亡した人間の数を数えるのが不可能となっただろう。すでに病気となり、死にかけて、街路で物乞いをする人々が、不運に対してではなく、命をつなぐために食料を賈わなくてはならないイングランド人たちに対する怒りをもつ、少しばかり運のよい人たちに加わった。通りはもちろん、公道沿いでも、イングランドに履行すべき債務や、その代りにしよい込んだ債務を残した者たちが充滿していた。国王の戦争は終わり、スコットランドの連隊が任務を解かれ、ストラス

ネイヴァーの歩兵、リーヴン、マッケイ、アーガイルの歩兵たちの生き残りが帰郷した。コーヒーハウスや居酒屋では、下士官たちが、勲章の数で口論したり、無駄な戦闘での自らの行動を自慢していた。彼らの部下たちは乞食や窃盗となるか、パンや仕事を求めて有力者にしがみついた。ソールトーンフレッチャーなら、同郷人たちに、ウィリアム王による長引く戦争に対する彼らの息子たちによる貢献の中での、大きな不均衡を思い出させただろう。すなわち、イングランドとオランダの海兵のうち、1万ないし1万1千人の海兵、20大隊の歩兵と6戦隊の騎兵隊のことだ。国内国外での国王の軍隊の5人に一人はスコットランド、あるいはスコットランド系アイアランド人であつた。さらに彼は言った。イングランド人たちは、「我々のことをどうでもいい者だと誇り、われわれが甘んじている貢献の割合を小さなものだとしている」と\*。

\* およそ150年ほどにわたり、イングランドはその戦争を、スコットランドやアイアランドから次から次へと補充された軍隊によって戦った。1840年まで、ウィリアム・バトラー（『農民の弁明』1878年）によれば、歩兵のほぼ60%はスコットランド人とアイアランド人であった。クリミア戦争になってもなおそれは44%であった。おそらく第一次大戦で徴兵制が導入されるまで、適切な割合ではなかったのである。

（ 続く ）

### 3. 補章 用語・人名・地名集

プレブルの原著には、注なるものがほとんどない。原著末には、肩書きも付された人名や、ダリエンに旅立った船舶名なども整理はされている。だが、ジャーナリストとしてのスタイルでもあろうが、地球の裏側の読者にはついてゆけない部分もある。そこで可能な限り、関係項目にと努力をした。緊急事態宣言前に訳注に取り掛かったが、図書館シャットアウトは不測の事態であった。特にせめて*DNB*だけでもとの目論見が崩れた。今日できることを明日まで延ばすなの例え通りである。不十分を承知の上以下に結果を記することにした。

桃山学院大学『経済経営論集』54/3, 2013年2月の拙稿, pp.64-71に



は、プレブルがおよそ70名程度を選択掲載している<sup>2)</sup>が、それ以上に、読み進めると既知とは言えない人物、諸事件、地名などに頻繁に遭遇する。プレブルの列挙以外に注を付そうとするとそう簡単ではない。

以下、原著のページ数の後に、関連する事項を記す。

P. 41

ジェイムズ1世 (1566-1625) (スコットランド王ジェイムズ6世) :

1603年イングランド・テューダー朝のエリザベス1世が亡くなる。1567年母メアリーの強制退位により、1歳でスコットランド王となって以来37年もの経験を積んだジェイムズ6世がイングランド王をも兼ねることとなった。ステュアート王朝の開始である。イングランドとスコットランドの両国は同じ君主を戴くことで連合体制となった。「同君連合」である。プロテスタント長老派の国からやってきたジェイムズは、同じプロテスタントでも国教会が主流のイングランドでは賢明なことに、両派の棲み分け政策をとったが、政治全般では議会と対立を繰り返した。1625年にその後を継いだチャールズ1世は、長期にわたって議会を無視して1642年の内乱・国王の処刑(1649年)を招き、クロムウェルの共和制の時代となった。共和制は比較的短命で、処刑されたチャールズの長男チャールズが亡命先のオランダから呼び返され、王政復古後のチャールズ2世として即位することとなった。君塚直隆『肖像画で読み解くイギリス王室の物語』光文社、2010年、第3章を参照した。

ジョンソン、サミュエル (1709-84) : ジャーナリスト、1747年から8年

---

2) アリストン、アンブロシオ、アンドリアス、第10代キヤムブル、バルフォア、ベルヘイヴン、ベルモント、ブラックウッド、ポーランド、パイレス、キャンブル、チーズリー、チーズリー、ドラモンド、アースキン、フレッチャー、グリーン、ホールデン、ハミルトン、ハミルトン、ヘーリーズ、ホッジス、マッケンジ、マーチモント、パンミュア、パターソン、リコ、シーフィールド、スミス、ジェイムズ、トウィードデイル、タリバーディン、ヴァーノン、クィーンズベリ、ウェイファ、などである。

をかけて『英語辞典』の編集、各種エッセイによって社会的文士として名をなす。

ラム, チャールズ (1775-1834) : エッセイスト, 東インド会社に勤務, 姉メアリとの共著『シェイクスピア物語』(1807)で名声を博し, 児童向け物語を書く。

シドニー・スミス (1771-1845) : 聖職者, エッセイスト, フランシス・ジェフリーなどと共に『エディンバラ・リヴィウ』の創刊に協力。

ホガース, ウィリアム (1699-1764) : 版画家, 『放蕩息子の遍歴』(1733-35), 大作『当世風の結婚』(1743-45)など, 近代的道德的版画に手を染める。

ロウランドスン, トマス (1756-1827) : 風刺画家, 国内旅行を通じてユーモアを, 水彩画で社会状況を描く。

ギルレイ, ジェイムズ (1757-1815) : 風刺版画家, 政治家たちを画材としたものが多い。数多くのスキャンダルによってとかく評価の分かれるジョージ4世だったが, 今日数多くのイングランドの知や美の殿堂, ナショナルギャラリー, 大英博物館, 王立美術院, リージェント・ストリートの建設, バッキンガム宮殿, ウィンザー城の改修などはこの君主の功績だとされるが, ギルレイはこの君主の風刺画で知られる。君塚前掲書第6章。

p. 42

スコットランド会社 : 緊張が継続する旧大陸との交易から大西洋への転換を強いられていたスコットランドは, 政府認可になる独占会社を所有する必要性に迫られ, 1693年スコットランド議会は, 戦時における貿易を遂行する貿易会社設置のための法律を通過させた。過ぎる1692年のグレンコウ虐殺事件解明の世論をかかわす必要から, ウィリアムはそれを認可した。続く95年5月, 「アフリカ, 西インドとの貿易に従事する会社」のための法律をも通過させた。この会社は, 以後31年間アジア, アフリカに対する貿易独占権を有し, 輸入は砂糖, タバコ以外は免税としたので, イングランド東インド会社から警戒, イングランド議会からも白眼視され, 同年12月の国会で

は上下両院が国王に抗議、国王は条文を批准しながら、この会社の設立を妨害することになり、イングランド人出資者も早々に資金を引き上げたので、スコットランドでは愛国的感情から40万ポンドもの資金が応募され、1696年7月ダリエンに植民地構築の決定が行われ、1699年第一陣が船出した。

アドミラルティ：旧海軍省本部は、1698年までの王宮であったホワイトホール・パレスに由来し、チェアリング・クロスからダウニング・ストリートと交わる地点までの大通り・旧官庁街ホワイトホールの西側にあった。現在でも残るアドミラルティ・アーチAdmiralty Archは、旧海軍省に由来する。ただ、本文に言われるコーヒーハウス「海軍省」がどこに相当するのかわからない。1660年から1669年までについて記された『サミュエル・ピープスの日記』にも当時の居酒屋、コーヒーハウスが多数登場するが、確かめられなかった。

イスカリオテのユダJudas Iscariot：イエスの12使徒の一人。銀貨30枚のためにイエスを裏切り、ゲツセマネでユダヤの権力者たちに逮捕させるようはからったとされる。

p. 43

リーワード島：西インド諸島東部の旧英国植民地の群島。

シリー諸島：イングランドのLand's Endの南西沖にある140の小島群。

スラートSurat：インドGujarat州南部の港市、ムンバイ北方。1612年インドで最初の英国商館が建てられ、英領インドの発端となった地。

p. 45

パターソン、ウィリアム（1658-1719）：ダムフリースシャのチンウォルド教区のskipnayre農場で誕生、イングランド銀行の融資並びに創始者。西インドの貿易にしばらく携わる。ヨーロッパに戻り、自らの財産をロンドンの銀行に統合整理して、1691年イングランド銀行の設置を提案した。1694年に銀行が設立された時には取締役となったが、1695年に辞任した。それどころかエディンバラに赴き、パナマ地峡のダリエンに新たな植民地を設立する計画を奨励した。この事業に資金を提供するため、スコットランド議

会はスコットランド会社を創設し、国家を挙げてこれを後援した。彼は最初のこの遠征には私財を携えて出帆し、その苦境の全てを引き受けて、1699年12月に生き残りたちと共に折れた葦として帰国した。それでもなお、彼の活力は衰えを知らなかった。彼は1707年のスコットランドとイングランド議会の合邦の促進に相当な役割を演じ、最初の合邦議会にはダムフリース・バラから選出された。彼は、ウォルポールの減債基金、国債の切替整理計画（1717年）を準備した。

デンマーク・ストリート：ソーホー近傍にDenmark Streetは現存する。

p. 46

絵画室Painted chamber：ピープス『日記』の臼田訳巻末に「ウェストミンスター会館」のプランがあり、その②が絵画室となっている。

p. 47

ウィリアム（1650-1702）→ウィリアム3世：チャールズ1世の長女、つまり王政復古でチャールズ2世となったチャールズの妹メアリーは、チャールズ同様母親のアンリエッタ・マリアとともに、チャールズの旗色悪化とともにブルボン王家のフランスに逃げていたが、10歳の時、1648年ウェストファリア講和でスペインから独立したネーデルランド共和国最大のホランド州総督となる人物オランジェ公ウィレムと結婚していたが、父の処刑の翌年（1650年）11月その夫ウィレムは天然痘で早逝し、その数日後メアリーは男子を出産し、父と同じくウィレムと命名した。その後1660年兄チャールズは王政復古のイングランド王となり、一家は故郷イングランドに戻るが、メアリーと母親アンリエッタは次々この世を去り、兄チャールズと弟ジェームズが処刑された父親チャールズの轍を踏んだため、ジェームズを玉座から追放する役回りを演じたのが、メアリーの一人息子ウィレムとなった。彼は伯父であったイングランド王国・ヨーク公ジェームズ（のちのジェームズ2世）の長女メアリーと結婚し、ルイ14世によるオランダ侵略に対して大陸諸国と同盟して対抗したが、イングランドが対仏同盟に参加しないと判明するや、その反対派を表明して、ジェームズ反対派の招請を受け、兵を率いて

イングランド西部に上陸ジェームズをフランスに追いやって、議会の提出した権利宣言を承認、妻メアリーとともにイギリス王位（ウィリアム3世、スコットランドでは2世）に即いた。王位奪還を意図するジェームズ支持者がアイアランドに上陸すると、これを迎え撃ち、ポイン川の戦いで勝利して、名誉革命体制を確保した。主要な関心は国際情勢にあり、たびたび大陸に出征した。前掲、君塚、p.64を参照。

ダウンズ：イングランド南部、および南東部地方の丘陵地帯、牧羊地。

p.48

ペティ・フランス：「プチ・フランス」現在の地下鉄セント・ジェームズ・パーク駅北側を東西にのびる通り。近辺に毛織物商を営むフランス人が多く住んでいたことから、「ペティ・フランス」と呼ばれるようになった。D・デフォー『疫病流行記』泉谷治訳、現代思潮社、1967年、p.38を参照。

ピムリコ：地下鉄ヴィクトリア・ラインのピムリコ駅から西に広がる地域。テムズ川北岸の、おおざっぱに言って、東はヴォクスール・ブリッジ・ロード、西はチェルシー・ブリッジ・ロード、テムズ川とイーベリ・ストリートに囲まれた地域。チューダー時代の宿屋の主ピムリコに基づくと言われる。19世紀前半まで低湿地で荒地の他は菜園とコリヤナギ畑だけであった。

ナミュール：ベルギー南西部の州。

ステア：→ステア子爵（1648-1707）：ジェームズ・ダルリンブルの息子。法律を学び、1667年騎士。ダンディーの抗争後、エディンバラで投獄され、重科料を課されたが、1686年には国王の代理人となり、1688年には首席法務官。ウィリアム3世の下では国王の法務長官、1691年からは国務大臣を兼務して、スコットランド問題の筆頭処理にあたった。彼は悪名高いグレンコウの虐殺（1692年）に責任があるとみなされ、1695年に辞任した。1703年に伯爵に叙された。彼は、合邦条約に連なる論争と陰謀に積極的な役割を演じた。

グレンコウの虐殺Massacre of Glencoe：1689年のジャコバイト蜂起に参

加したクランに、ウィリアム3世は忠誠を求めたのに対し、マクドナルド一族が1692年1月1日の期限で忠誠を誓わなかったため、1692年2月13日政府軍に処罰された事件。背後にはマクドナルドと対立したグレンライアのキャンブルがいたことで、物議を醸した。

p. 49

ワイ川：ウェールズ中部に発し、イングランド南西部を流れて、セヴァーン河口に注ぐ。

p. 52

ネビス，ニービス：西インド諸島東部，リーワード諸島中部の島。

p. 55

デンマーク・ストリート：既出

ソロモン：イスラエルの王。外見上は輝かしい治世で、王国を拡張し、エルサレムに大神殿を建設，しかし厳税や異教徒の宮廷と結んで不平を買い，これが原因でのちに息子のレハベアムの時代に王国は分裂した。ソロモンは非凡な知恵を持つとされ，ユダヤ教での伝説的人物となり，その名は聖書のいくつかに記されている。

フレッチャー，アンドルー，ソールトンの（1655-1716）：1681年スコットランド議会で議席を得て以来，一貫してスチュアート朝の政策に対抗したことで，二度にわたりオランダへの亡命をせざるを得なくなった。オレンジ公ウィリアムと共に，1688年の革命時スコットランドに戻った。彼は，ダリエン遠征の企画者・ウィリアム・パターソンの第一の後援者となったが，ダリエン植民者たちの取り扱いによりスコットランドで起こった苦難は，イングランドとの合邦に反対する闘争において，彼と国民主義的党派に，力を与えた。国民的歌謡は，その法律以上に影響力を持つという有名な考え方の支持者で，彼の言う「制限制」は，統合的な合邦ではなく，連邦的なものの構築を目標とした。フランスの侵入に共謀したとのかどで短期間（1708年）投獄されたが，合邦の後には公的生活から引退し，農業の振興に邁進した。彼は，オランダから唐箕とポット大麦を導入した。その諸著作は，1732年

に覆刻された。

p. 56

ウォレス、ウィリアム：反イングランド抵抗運動、スコットランド独立運動の指導者。1295年には反乱鎮圧のイングランド軍をスターリング・ブリジの戦いで破り、イングランドの支配体制を瓦解させたが、イングランド王・エドワード1世率いる討伐軍にフォルカークの戦いで敗れ、翌1299年には渡仏して国王フィリップ4世に支援を求めた。その後1303年まで抵抗するが、1305年8月グラーズゴウで捕縛され、ロンドンに送られ、反逆罪で絞首刑となり、その四肢はブリテン島各所に送られた。

p. 57

国民契約：1638年、スコットランドに対する新たな祈祷書の導入に際し、チャールズ1世の政策に対抗して、スコットランドの人々に支持が求められた長老主義の立場からの宗教文書。カトリックの教義を否定、スコットランドの信仰と教会統治のあり方を、ジェームズ6世の時代に定められた諸法を列挙して、その保持が国王の務めだと説く。契約は国王の権威を軽視はしないが、契約署名者は、教会の自由を守り、教会総会が教会の主導権を奪回するまで、近年の国王による諸政策を退けると神に誓った。大別すると、主教制と長老主義のせめぎ合いの歴史の中で、1660年までの長老制の時代の開幕とされる。

テイ川：スコットランドで最も長い川193キロメートル。ベン・ルイ山の源流からキリンへと流れ、テイ湖に流れ込んだ後、南下、パースを抜けて東海岸のテイ湾へ流れる。

マックファーレン：スコットランドの100の著名の一、60位。ちなみに、トップはSmith, Brown, Thomson, Macdonald, Robertson, Wilson, Campbell, Stewart, Anderson, Millerと続くようである。しかし本書に登場する同時代のスコットランド人たちの同定には未だ時間がかかる。

p. 61

ミルン・スクエア：ステュアート・ハリス著『エディンバラ地名辞書』

1996刊にはミルン・スクエアの由来があり、1684年から1688年にかけてロバート・ミルンによって造営されたことに由来することになっている。

p. 65

クロムウエル (1599-1658) : いわゆる清教徒革命の指導者。

p. 65

ダンピア, ウィリアム (1652-1715) : 航海者, 海賊。サマーセット州生まれ, ニューファウンドランド島, 西インド諸島を航海, 南アメリカ太平洋岸を襲う海賊団に参加, 1683年太平洋を横断しフィリピン, 中国, オーストラリアを訪れ, 帰国後すぐに『最新世界周航記』(1697) <『最新世界周航記』 *A new voyage round the world*, 1717 <平野敬一訳, 岩波文庫, 2007年>を出版。ついで南シナ海を発見する航海を先導, オーストラリア北西沿岸を探検, ダンピア群島, ダンピア海峡に名をとどめた。

ウェイファ, ライオネル (1660-1705?) : 《航海者, 海賊に, 航海記録者を付加した訳者平野敬一の意図を汲んで。》平野訳ダンピアには, 船医ライオネル・ウェーファはインディアンの中で数ヶ月暮らし, その間, 優れた医療技術を有していたため神のように尊敬を受け, インディアンの王女と婚約する話もあったという。付言すれば, ダンピアの原著は, 初版1697年とされるが, 本書の引用部分にもあるように, 第2版が1705年。「ダリエン計画」出立の時代には, 初版が出版されたばかりで, その情報にもとづいてパターソンたちは思考を繰り返したと思われる。

p. 66

コクソン (?-1698) : シャープなどは, ダンピアの『周航記』序章にも登場するが, 私掠船の船長と思われる。岩波文庫, 上, 17-18ページ。

バーソロミュー・シャープもダンピア同書に登場する。アリストンやトマス・マゴットも同様の船長たちだったと思われる。

ドレイク, フランシス (1540?-96) : T. キャベンディッシュ (1560-92), J. ホーキンス (1532-95) とならぶ, エリザベス女王時代の3人の大航海者の一人。大西洋での海賊, 奴隷貿易などに従事, 中南米のスペイン領を攻撃



して巨万の富を手にし、西アフリカからマゼラン海峡を經由北上、太平洋横断、インドを経て希望峰回りで帰国、イギリス初の世界就航を達成、無敵艦隊迎撃で軍功を立てた（1588年）が、1595年西インド諸島遠征中に、ポルトベロ沖で病没。ちなみに、トーマス・キャベンディッシュ（1560-92）は3人のうちで最も知られていないが、彼は、ドレイク後8年を経た1586年に世界周航を果たした。ドレイクは1577年、「ペリカン号」にてプリモスから出航したが、その航海で世界周航を果たすに至った。その船は、航海途上で「ゴールデン・ハインド号」と改名されたが、1580年に世界周航を終えてロンドンに帰着した。なお、西洋人としてはマゼランの探検隊に次いで史上2番目の世界周航であった。

p. 67

レアル・デ・サンタ・マリア：サンタ・マリアは、サン・ミゲル湾に注ぐサンタ・マリア川沿いの町。

p. 71

クーナ：パナマのIthmus, San Blas湾に島々に住む北米インディアン。

チャコウ：コロンビア西部、西は太平洋、北東はアトラト河川、南にアンデス山脈、北はカリブ海とパナマ地峡の地域。

コルテス、エルナン（1485-1547）；メキシコの征服者。1519年メキシコ遠征を指揮、ベラ・クルスを建設、アズテカの首都まで行軍。メキシコ人の蜂起で撤退、再攻撃によって1521年首都を陥落させた。

p. 75

ボルジア（1431?-1503）：ボルジア家出身のロドリゴ＝ボルジア、ローマ教皇としてのアレクサンデル6世は、コロンブスのカリブ海域到達の翌年1493年、スペインの要請によって、教皇子午線（教皇境界線）を設定し、線の東をポルトガル、西をスペインが領有することとした。彼の教皇としての仕事は、コロンブスのインディアス（西インド諸島）への到達に始まるスペインとポルトガルの海外領土をめぐる争いを調停すべく、1493年に植民地分界線として教皇子午線を定めたこととされる。

ノンブレ・デ・ディオス：「神の名」を意味するダリエン北岸の町。スペイン人が創設。南アメリカ・スペイン植民地からの財宝集散地、ドレイクがこの街を襲撃後、町は西方のポルトベルの港へと移された。ダンピア『最新世界周航記』上、注(20)参照。

カルタヘナ：コロンビア、カリブ海岸の港町。

ポルトベロ：パナマ北岸、カリブ海に面する港都市。スペイン・ガレオン船の寄港地。

モーガン：1635-88、後のジャマイカ総督。ダンピア『周航記』454ページ。

p. 79

Coulは、ハイランド・タイサイドの地名。

p. 82

グレンイーグル；タイサイドの地名

ゲーロック：ストラスクライドの地名

### 参考書

Anderson, William, *The Scottish Nation, or the surnames, families, literature, honours and biographical history the people of Scotland*. 3 vols, Edinburgh & London, 1863.

*BBC Pronouncing Dictionary of British Names*, Oxford, 1983.

Darton, M., *The Dictionary of Scottish Place Names*, Mofat, Scotland, 1990.

Dorward, D., *Scottish Connection, Scottish Surnames*, Worcester, 1978.

Mills, A. D., *A Dictionary of English Place—Names*, New York, 1997.

Goring, Rosemary, *Chambers Scottish Biographical Dictionary*, Edinburgh, 1992.

Robinson, Mairi, *Concise Scots Dictionary*, Aberdeen, 1985.

Warrack A., *Chambers Scots Dictionary*, Edinburgh, 1974.

蛭川久康/櫻庭信之/定松昌家/Paul Snowden『ロンドン事典』大修館書店、2002年『岩波ケンブリッジ世界人名辞典』、1997年（&2013年版では2巻本の『岩波世界人名辞典』と改名している）。